

平成21年 5月 10日現在

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2006～2008

課題番号：18720069

研究課題名（和文） リヒテンベルクとホガースの間メディア性についての研究

研究課題名（英文） Intermediality between Lichtenberg and Hogarth

研究代表者

濱中 春 (HAMANAKA HARU)

法政大学・社会学部・准教授

研究者番号：00294356

研究成果の概要：

本研究は、ゲオルク・クリストフ・リヒテンベルクがウィリアム・ホガースの銅版画を解説した『ホガース銅版画詳解』（1794-99）における言語とイメージという表現媒体の関係を考察したものである。その結果、リヒテンベルクが現代の美術史学と多くの問題意識を共有しているという現代性と、それは彼がホガース解釈を实践するテキストの言説を分析することではじめて浮かび上がってくるという歴史性とが見出された。そして、言語とイメージを相互にその特質を解明しあうものととらえることの意義が明らかになった。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	900,000	0	900,000
2007年度	800,000	0	800,000
2008年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	2,300,000	180,000	2,480,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学(英文学を除く)

キーワード：ドイツ文学・美術史・言語とイメージ・間メディア性・リヒテンベルク・ホガース

1. 研究開始当初の背景

リヒテンベルクのホガース解説にかんする研究は、これまで主にドイツ文学研究者によって行われてきたが、そこではもっぱらリヒテンベルクのテキストに関心が集まり、そのテキストが本来、対象としているホガースの絵の絵画的特性には、補足的に言及される程度であった。一方、美術史学においては、ホガース研究には長い蓄積があるが、その中でリヒテンベルク的美術史的な意義につ

いての指摘は補足的、周縁的なものにとどまっていた。

このように従来、リヒテンベルクの文学的研究とホガースの美術史学的研究が別個に行われていたのに対して、美術史学の知見に基づいてリヒテンベルクにアプローチすることによって、リヒテンベルク研究に新たな光をあてることができるとともに、ホガースの絵を解説するリヒテンベルクのテキストを文学や言語研究を手がかりに分析するこ

とによって、文学研究から多くの理論や概念をとり入れている美術史学にも自己省察の契機を与えることができると思われた。

また、近年、ドイツ文学研究が文化研究的な傾向を強める中で、間メディア性 (Intermedialität) の研究は、その領域横断的な性格により重要性を増している。本研究は、リヒテンベルクとホガースという対象を通して、ドイツ文学研究のアクチュアルな関心にこたえながら、その新たな可能性を拡大するという意義を持つと考えられた。

2. 研究の目的

本研究は、ゲオルク・クリストフ・リヒテンベルクの『ホガース銅版画詳解』(1794-99)をおもな対象として、リヒテンベルクのテキストとイギリスの画家ウィリアム・ホガースの絵との間における言語とイメージという二種類のメディア間の相互関係を考察するものである。その目的は、両者の間に見出される間メディア性の特徴とその歴史性および現代性を明らかにすることである。

具体的には、本研究では、修辞学・テキスト理論・記号論などの文学研究の理論的枠組みと、ホガース研究・美術史研究の手法や成果とのいずれをも視野に入れながら、絵とテキストを比較し、両者の間の関係を考察する。つまりこの研究は、文学研究と美術史研究の両方にまたがり、二つの領域を架橋する試みである。そして、それを通して、言語とイメージの間メディア性という現代の文学研究・美術史研究において大きな関心を集めている問題系の歴史的な展開を確認し、今後の議論の方向性を明確化することを目指す。

3. 研究の方法

本研究は、ヨーロッパの芸術論における言葉とイメージの関係にかんする議論の歴史と、18世紀におけるその展開、および現代の美術史学や文学研究における間メディア性をめぐる理論をふまえた上で、『ホガース銅版画詳解にかんする』(1)言語的要素、(2)絵画的要素、(3)間メディア的要素、の三領域についての考察からなる。研究期間の各年度にそれぞれの要素について、具体的には以下のテーマをとりあげて考察した。

(1)言語的要素 (2006年度): ホガースの絵の中の音声の描写にかんするリヒテンベルクの解説について、レッシングのラオコーン論を参照項として考察した。

(2)絵画的要素 (2007年度): ホガースが描いた顔にかんするリヒテンベルクの解説をラーファーターの観相学と比較して考察した。

(3)間メディア的要素 (2008年度): ホガースの絵の中のジグザグ線にかんするリヒテンベルクの解説を、ホガースの美の曲線と関連づけて考察した。

いずれの年度もドイツの図書館 (ゲッティンゲン大学図書館、ハノーファー大学図書館、ニーダーザクセン州立図書館、ベルリン芸術図書館、ベルリン自由大学図書館、フンボルト大学図書館、ベルリン国立図書館等) で資料収集・調査を行うとともに、2007年度にはイギリスの大英図書館、大英博物館、ナショナル・ギャラリー、ナショナル・ポートレート・ギャラリー等においてもホガースの絵画と18世紀の肖像画について調査と資料収集を行った。また、研究期間中にドイツのホガースおよびリヒテンベルク研究者 (ベルリン自由大学美術史学部 Werner Busch 教授、ダルムシュタット工科大学言語・文学部 Ulrich Joost 教授) と研究内容について協議した。

4. 研究成果

まず、上記「3. 研究方法」で挙げた三つのテーマについての研究成果はそれぞれ以下のとおりである。

(1) 音声の表現

『ホガース銅版画詳解』における絵の中の声や音の解説について、とくにレッシングのラオコーン論を参照項として、リヒテンベルクが絵画というメディアによる音声の表現をどのようにとらえているか、またリヒテンベルク自身は言語というメディアによって音声、とくに非分節音をどのように表現しているかという二点を中心に考察した。おもにとりあげたのは、ホガースの『怒れる音楽家』、『娼婦一代記』第二・四図、『当世風結婚』第四図にかんするリヒテンベルクの解説である。

レッシングは絵画を自然的記号、言語を恣意的記号として区別しているのに対して、リヒテンベルクは絵画による音声の表現は言語と同様に読み解かれるものであるとみなしていることから、リヒテンベルクはレッシングとは異なり、絵画も言語と同じく恣意的記号としてとらえているといえる。また、レッシングは言語の中でもオノマトペや間投詞は自然的記号であるとみなしているのに対して、リヒテンベルクはそれらもまたあくまでも擬似的な自然性にすぎないことを指摘している。そして、言語音という分節音によって非分節音を模倣とは異なる方法で表現し、生成させることを試みており、それによってリヒテンベルクのテキストでは言語の表現可能性が

拡大していることが明らかになる。

(2) 顔と観相学

観相学を顔というイメージを言語を用いて解釈するといふことと捉えれば、リヒテンベルクのホガース解説における観相学的実践には、絵画の解釈である彼のホガース解説全体のあり方が縮約されているといえる。ラーファーターが顔というイメージの解釈をその意味を「命名」という言語化のモデルでとらえ、原理的にはあらゆる顔の意味は言語に還元可能であるとみなしているのに対して、リヒテンベルクはイメージと言語という表現媒体の相違を認めている。だが、それにもかかわらず顔、そして絵画を言語によって解釈することを断念しないリヒテンベルクのテキストにおいて、言語とイメージはどのような関係にあるのだろうか。このような問いを考察の出発点として、主としてホガースの『放蕩息子一代記』第二・八図と『娼婦一代記』第三図についてのリヒテンベルクの解説をとりあげた。

ラーファーターの観相学とは異なり、リヒテンベルクはホガースの絵の中の顔について、それがあらゆる性格や感情といった意味だけではなく、肖像の同定と顔の認識という観点からもアプローチしており、さらにそれらの否定性、つまり、顔の無意味さ、同定不可能性および認識不可能性という問題もとりあげている。このように多角的・重層的な顔へのアプローチからは、顔というイメージの意味の言語化不可能性、イメージの特性としての「語る」のではなく「示す」力、イメージの潜在性が明らかになる。これらはいずれも現代の美術史学において、言語に還元できないイメージ固有の意味産出方法を探求する手がかりとされている現象だが、本研究においては、それらがリヒテンベルクのテキストの分析、とりわけ翻訳、モダリティ、プロセスの記述といった言語の遂行性を通して明らかになったことが強調できる。イメージを解釈する言語の分析は、イメージおよび言語の意味生成構造を解明する手がかりとなり得るのである。

(3) ジグザグ線と美の曲線

18世紀後半の美学においては、S字型の蛇状曲線とZ字型のジグザグ線はしばしば対比され、前者が美的に肯定的、後者が否定的に評価されている。それに対して、リヒテンベルクは覚え書の中でそのような対比を相対化しているだけではなく、(二重の)ジグザグ

線だけを図示しているように、ジグザグをけっして否定的にとらえていないことが特徴的である。そこで、ここではジグザグ線をめぐりリヒテンベルクの見解を、ホガースの『放蕩息子一代記』第四図の解説を中心に考察した。

そもそも線は造形芸術における時間の表象であるとともに、物語もまた線條性をもつという点で、線は視覚的イメージと言語テキストとを媒介する要素である。そして、ホガースの銅版画の中で、稲妻の図像としてジグザグ線が最も鮮明に描かれている『放蕩息子一代記』第四図にかんするリヒテンベルクの解説からは、稲妻という瞬間性を象徴する現象であっても、ジグザグ線で描かれることで、時間の経過をとらえた運動としてとらえられることと、絵の中のジグザグ線は、絵物語の主人公の人生行路をあらわすとともに、それを一連の絵で語る絵物語自体の語りの形式をもあらわしていることが明らかになる。そして、それに対して言語による物語はなめらかに断絶のないものとして対比される。つまり、リヒテンベルクは、蛇状曲線とジグザグ線の違いを、言語による物語と絵による物語のそれぞれの語りの形式の差異として読みかえているのである。

しかし、リヒテンベルクはまた、スターンの『トリストラム・シャンディ』のように言語による物語も脱線や逸脱によってジグザグ線状に語られる場合もあることを認めている。そして、それはほかならぬリヒテンベルク自身の解説テキストの特徴でもある。ホガースの絵物語は出来事を時間軸にそって断続的にジグザグ線の原理で語るストーリーであるのに対して、リヒテンベルクのホガース解説は、それを時間的に前後し逸脱を重ねながらジグザグ線の原理で語るプロットであるという点で、リヒテンベルクが覚え書にみずから描いた「二重のジグザグ線」を物語論的に体現しているのである。

以上のような個別のテーマにかんする考察をとおして本研究の全体からは、リヒテンベルクが現代の美術史学と多くの問題意識を共有し、ホガースの絵がそれらの問題にこたえる興味深い事例であることを明らかにしているという現代性と、リヒテンベルクにおいてはそれらの問題は理論的に論じられているのではなく、あくまでも彼がホガース解説を記述をとおして実践するテキストの言説を分析することではじめて浮かび上がってくるという歴史性が見出された。

とくに本研究の成果として強調できるのは

、ホガースの銅版画を解説するリヒテンベルクのテキストをその内容と形式の両面から考察することをとおして、ホガースの絵、そして視覚的イメージそのものがもつさまざまな特徴が明らかになると同時に、言語という表現媒体の可能性もまた浮かび上がってくることである。リヒテンベルクはホガースの絵を独特の注意深さで観察しているだけではなく、その過程や結果をテキストの中で独自の言語感覚のもとで表現している。そして、その言語表現を分析すると、現代のホガース研究や美術史学の関心や論点の多くをリヒテンベルクが先取りしているだけではなく、しばしばそれらをより精緻かつ正確にとらえていることがわかる。近年の美術史学や視覚文化研究、あるいはドイツ語圏で模索されているイメージ学は、言語を視覚的イメージの最大の対立項として、イメージを「言語ではとらえられないもの」「言語とは異なるもの」と規定することでそのアイデンティティを確立しようとする傾向がある。しかし、リヒテンベルクのホガース解説は、そのように言語とイメージとを対立させるよりも、両者を相互に説明しあうものとしてとらえることが、言語およびイメージ双方の特質をあきらかにし、それぞれの表現可能性をさらに開けてゆくという意味で実り多い成果をもたらすことを示している。そして、イメージの原理を理論的に論じるのではなく、具体的な作品を記述しながら解説するテキストであるリヒテンベルクのホガース解説は、そのような言語とイメージの相互説明の可能性をみずから体現しているといえる。

最後に、今後の展望を述べておきたい。本研究はリヒテンベルク研究あるいはホガース研究に一定の成果をもたらしたとすることができるが、同時にそこからは、リヒテンベルクとホガースのあいだの間メディア性の問題は、彼の銅版画解釈を文学と美術史学という二つの次元から考察するだけではとらえきれず、リヒテンベルクの自然科学研究や、彼が『控え帳』や書簡に描き残しているスケッチなど、他の領域における活動も視野に入れる必要があることも明らかになった。ドイツ文学をふくむ文学研究が20世紀末以降、文化研究という潮流の中で拡大・変容しているのと同様に、美術史学という領域もまた、近年、大きく変貌をとげつつある。文化研究的な視座は、従来の文学と美術史学の境界だけではなく、人文科学と自然科学、ハイ・カルチャーとサブ・カルチャーの境界にも見直しをせまった。そしてそれは、間メディア性もまた

従来の言語芸術と造形芸術の関係としてだけでなく、多様な形式の言語表現とイメージを対象として探究すべきことを示唆している。

このような現代の学問的状况を念頭におくと、リヒテンベルクのホガース解説だけではなく、自然科学研究や私的な覚え書など多面的な活動に視野を広げることで、間メディア性を18世紀という歴史的な文脈の中で把握しながら、そこに現代的な意義を見出せる大きな可能性がひそんでいることがわかる。たとえば、いわゆるリヒテンベルク図形が電気という不可視の現象を可視化するものであるように、実験物理学者リヒテンベルクにとって、実験によって自然現象を可視化し観察すること、それを言語で記述し説明することは切り離せない。また、リヒテンベルクが『控え帳』や書簡、日記などの私的な文書に多く描き込んでいるスケッチや落書きに近い図は、テキストと同一の平面に同一の手段で描かれており、そこでは「書く」と「描く」ことがまさに混在している。このようにリヒテンベルクの活動にはメディア間の相互関係が多様に見出され、それらを解明することで、彼のホガース解説をより多角的に理解することもまた可能になると思われる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

① 濱中 春、„Seine Manier en Ziczac oder Ziczac à double Ziczac.“ Ästhetik der Linie bei Lichtenberg und Hogarth、Dokumentationsband der Asiatischen Germanistentagung 2008 in Kanazawa、2009年、頁数未定、査読無

② 濱中 春、顔・イメージ・言語 — リヒテンベルクの『ホガース銅版画詳解』における観相学 —、大阪大学独文学会『独文学報』、第24号、2008年、75-92、査読有

③ 濱中 春、Stimmen und Töne im Bild. Erklärung und Darstellung des Akustischen in Lichtenbergs Hogarth-Kommentaren、„Lichtenberg-Jahrbuch“、2007年号、2007年、65-81、査読有

〔学会発表〕(計3件)

① 濱中 春、Ästhetik der Linie bei Lichtenberg und Hogarth、Asiatische Germanistentagung 2008 in Kanazawa、金沢星陵大学、2008年8月27日

② 濱中 春、イメージとしての顔と言語—リ

ヒテンベルクの『ホガース銅版画詳解』における観相学一、日本ヘルダー学会春季研究発表会、立教大学、2008年5月25日

③濱中 春、Gesicht - Bild - Wissen. Physiognomik in Lichtenbergs Hogarth-Erklärung、Humboldt-Kolleg Rikkyo 2008、立教大学、2008年3月15日

6. 研究組織

(1) 研究代表者

濱中 春 (HAMANAKA HARU)
法政大学・社会学部・准教授
研究者番号：00294356

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし